

半年の文通

昭和四十年代の半ばころ、私は山間の中学校から大分高専に入学して寮生活を始めた。携帯とかメールのない時代、流行りは文通だった。親元離れたことだし、私も誰かと手紙のやり取りをしたいと思った。相手として思い浮かんだのが中学校で三年間同じクラスだった女の子だ。昔風の言葉で言うと、優しく清楚な美少女で、地元の普通高に進学していた。私はダメモトの気持ちで「文通してほしい」と手紙を書いた。すると、「私で良ければ」と嬉しい返事があって手紙の交換が始まった。意外なことに、彼女も文通は初めてだった。

夏休みには隣町で会って喫茶店で言葉を交わし、神社を散策したー。顧みれば、あれはデートだった。八月末には彼女が事故で入院したと聞き、バナナを一房抱えて病院まで見舞いに行ったこともあった。

その後順調に文通が続いた十月、突然「私を理想化していませんか」と書かれた手紙が来た。私が熱くなっていたのかもしれないし、高専が含まっていないと悩んでいたから、それが絡んでいたかもしれない。しかし、純粹だったのか、当時の私はその言葉が許せず、「理想化などしていない。もしもそう感じたとすれば、それはあなたのせいだ。これで文通は終わりにしよう」と赤ペンで書いて絶交した。

その後私は三年で高専を中退して大学の文学部に進学した。そして、ヘルマンヘッセの『車輪の下』や福永武彦の『草の花』を読み、「ああ、あのとき確かに自分は理想化していた」とわかった。「あれが自分にとっての初恋だった」とも思った。

いつか再会したら、最後の手紙について謝りたい。そう思いつつ時は流れ……二年前の秋、別府で行われた還暦を祝う会で、私は久しぶりに彼女と会った。お孫さんがいたけれど、彼女は昔の面影を充分残して美しかった。私はその場で十分ほど言葉を交わした。しかし、その後のこととか最近の話題に終始して文通のことを話せないまま別れてしまった。

宴会を終え、枯葉の舞う街路を歩きながら、私はなぜ話せなかったのだろうと考えた。そんな昔の話をいまだに覚えているのか、と思われることが恥ずかしかったし、「そんなことあった？」と言われるのが怖かったからだと思った。私にとっては初恋だったけれど、彼女にとってそうでなかったなら、たぶん忘れているだろう。大切な思い出というのはきつと自分の中だけに閉じこめておくべきものなんだー私は自分に言い聞かせるように、そうつぶやいていた。